

学校ボランティアについての一考察

—所与性と対話—

大西 勝也

はじめに

小論では、学校ボランティア（学校支援ボランティア）の実践者に見てとれる特性の一端としての所与性と対話の構造について現象学的視座より記述してみたい。学校ボランティアの実践者を、ここでは、仮称Bとする。

1. 所与性

Bは学校ボランティアを実践するために学校を訪れる。そこには、児童・生徒たちがいるし、教職員たちがいる。それらの人たちは、いうまでもなく、Bとは別の身体を生きる、別人格である。相互に別人格どうしである。B以外の方は、すべてそれぞれの人生を生きている。それぞれに独立した、自律した思い・想い、考え、感覚・感情、意志等があり、誰一人として他の人のコピーではない。Bにとって別の人格、別の人間としての他者に他ならない。Bの思いのままにならない自分と異なる存在としての他者たちが学校にいる。こうした他者たちとの出会いから学校ボランティアはスタートする。Bは学校を学校ボランティアとして訪問する以前の所与の現実と向き合うところから始めなくてはならない。まず、自分以外の別人格がそうあるところのありのままの事実をまず受け入れなくてはならない（事実すべてを無批判に肯定・受容するというのではない）。もちろん、自分の好みや考えがどうこうという前にある現実・

事実というものへの遭遇は学校ボランティアに限ったことではない。

自分がこの世の創造者・支配者でない限り、時空における有限な存在者である限り、この事態は避けられない。

学校に話を戻すと、一人の生徒Aがいるとする。その生徒Aのそれまでの成育歴、生活環境、人間関係、発達をはじめとする変容の過程を変えることはできない。Bにとっては、その歴史とその結果である今の現実をなかったことにすることはできず、向き合うところから始めるしかない。Bは、学校ボランティアとして何らかの形でAと関わりをもつことで、Aのこれからの成長（変容）にいささかの影響を与えることができるかもしれないし、できないかもしれない。しかし、別人格のAをコントロールすることはできない。正規の教員としてではなく、学校ボランティアとして学校に現れるBは、学校の教育活動への助力者としてAの成長を正規の教員と協力して、比喩的にいうと、控えめに支援する。結果、Bが何らかの成長（変容）のきっかけをもたらすこともありえる。しかし、それは、A個人の所与性と学校の流儀としての所与性を受け止め、それに相応した支援として現れるものでなくてはならない。

学校の流儀としての所与性とは具体的には何であろうか。Bが学校ボランティアとして学校に来る以前にすでにある学校運営の方針やルール、そして、それを実現しようとする教職員の思考、判断、感情、意志を指している。ただ、

現実的には、すべての教職員の思考、判断、感情、意志が常に同一ということはありません、Bがこの状況の中でそのつど意識し、確認するものとして、内面化されたものである。場合によっては、内面化されたものどうしに不整合があるように思われることもあるかもしれない。そのときは、確認が必要となる。

さて、児童・生徒が生活する学校の現状の総体がBにとって所与性であり、また、教職員の一人ひとりの資質・能力の現実、児童・生徒一人ひとりの資質・能力の現実、そして、教職員および児童・生徒の一人ひとりの人格の具体的特性としての個性を受け入れた上で、Bは今の自分が学校ボランティアとしてできることに取り組んでいく。教育実習とは違って、通例、授業を担当したり、生徒指導や進路指導を責任もって行う立場ではないが、授業の指導の補助者として、個別支援学級や学習支援教室の個別指導の補助者として、部活動の指導の補助者として、学校行事の準備の補助者として、野外活動の補助者として、児童・生徒の学習や活動を支援するのである。

2. 対話

学校における児童・生徒の学習や活動を支援する際、Bは、専任の教職員のそれと比べて、あくまでも補助的な立場に留まるにしても、Bも児童・生徒との関わりをもつことは確かである。そして、当然、状況に応じて、児童・生徒との対話の機会は生じる。Bにとって、学校ボランティアとして経験をすることの意義は学校現場を身をもって体験し、知る機会を得るということに他ならない。これ自体、大きな意味をもつ。こうした機会の中で起こる対話とはどのようなものか。個別指導の時間、休み時間や昼食の時間、部活動の時間、学校行事の準備の時間、野外活動の時間といったいろいろな機会に対話が起こりうる。その時間の性格により話題に違いがみられたり、指導する者と指導

される者という役割分担の関係性が比較的在前面に出る時間（個別指導の時間）とそうでない時間（学校行事の準備や野外活動の時間）とがあったり、一様ではない。そうはいうものの、すべての時間において児童・生徒との関係性は一方的なものではありえない。どの時間においても、相互に対面し意思疎通を図ろうとする意志、発信・受信の往復、発信・受信する意味内容から構成される対話が成立することによって相互信頼の関係性は生まれ、対話が継続していく。学校ボランティアには、その経験や性格にもよるが、学校を訪れた当初、この対話のきっかけをどう作るかということと苦心するということがしばしば起こる。これは人間が新たな環境の中に入った場合、適応するまで人間関係作りに苦勞することと相似している。

しかし、学校ボランティアであるBの場合、それとは違う特殊事情があると思われる。学校が教育の場であることはあまりにも当たり前の事実であるが、この教育の場であることにその特殊事情が由来している。児童・生徒の発達段階や心理、個性、課題状況、関心・趣味、得意・不得意、能力・資質の現状などをある程度知り、理解しようとする姿勢があつてこそ、個々の児童・生徒との対話が成り立つからである。学校ボランティア(B)であっても、この姿勢は必要となる。児童・生徒の現状、言い換えれば、さきに述べた児童・生徒の所与性を知り、理解しようとする姿勢が児童・生徒との対話には欠かせない。もちろん、児童・生徒のいろいろな所与性をいきなり知り理解することはできない。時間がかかるが焦って知ろう・理解しようとするのが逆に児童・生徒に息苦しさを感じさせ、学校ボランティア(B)との距離はかえって広がるであろう。そもそも、他者を知り、理解できると考えることは不遜なことといえるのかもしれないが、少しでも他者を知り、理解しようとする姿勢は、教育という営みにおいて欠くことができないのも確かである。時間がかかるが気長に関係を保ち理解し合うという姿勢を

もって、機会があれば、学校ボランティア（B）は対話を実践する。

対話は制度的な枠組みにより最初は不自然な感じで始まる場合もあれば、何度か学校ボランティア（B）が児童・生徒に声をかけするうちに児童・生徒から学校ボランティア（B）にコミュニケーションをとってくる場合もある。前者の場合、学校ボランティア（B）が学習指導において児童・生徒が自覚するような成果を生み出すことにより、信頼関係が形成され、児童・生徒が学校ボランティアその人（人格）に関心を持つようになると、対話は生じやすい。後者の場合、児童・生徒が学校ボランティア（B）その人（人格）に関心を持ち、対話が生じ、そこから学習指導を欲し、学校ボランティア（B）がそれを実践し、児童・生徒が自覚するような成果が生み出されるとさらなる対話が生まれる。対話には学校ボランティアと児童・生徒の双方が意識・自覚した指導・学習プロセスに起こるものと、児童が学校ボランティア（B）その人（人格）に関心をもつきっかけになりうるあいさつや世間話から起こるものがある。多くの場合、この2つの対話は交錯する関係にあると思われる。次に、この関係をしばし省察し、記述してみたい。（続く）。

【参考文献】

- 金子晴勇 「対話の構造」 玉川大学出版部、1985
- ボルノー（浜田正秀訳）「教育の人間学的考察」 玉川大学出版部、1971
- ボルノー（峰島旭雄訳）「実存哲学と教育学」 理想社、1966
- 2015年度『学校ボランティア通信』（横浜キャンパス）
『神奈川大学 心理・教育研究論集』第39号、神奈川大学教職課程研究室、2016